

佳作

お福分け

京都府 ノートルダム学院小学校四年 青山 葉奈

私には、高校生のKちゃんという友達があります。Kちゃんは、病気で歩くことができなくなりました。目も見えなくなり、耳には補聴器をつけています。体にはチューブがつながっていて、薬や栄養を入れて体の中でいらなくなったものを出したりしています。

Kちゃんに初めて会った時、

「Kちゃんはじめまして。」

と声をかけました。すると、私の方に手を伸ばして、手を握ってくれました。私は、Kちゃんの体から出ているチューブが抜けないか心配で、どこまで近くにいる大丈夫なのかなど思いながら話しかけました。また、Kちゃんのような友達が周りにいなかったのも、どのようにコミュニケーションをとったら良いかわかりませんでした。

それからしばらくしてKちゃんに会った時、Kち

ゃんはお菓子の袋を持っていました。そのお菓子をKちゃんのお母さんに開けてもらって食べようとしたKちゃんは、何も言わずに一枚目のお菓子をそつと私の前に差し出してくれました。私が受け取って、「ありがとうございます。」

と伝えると、二枚目のお菓子をKちゃんは食べ始めました。Kちゃんから「どうぞ」という言葉はなかったけれど、私が受け取るまでお菓子を目の前に出してきていたので、私に食べてほしかったのだと感じ取ることができました。

もし、私がお菓子を食べようとする時に一枚目のお菓子を誰かにあげようと思ったことはありません。なので、Kちゃんが私にしてくれたことにおどろき、優しく思いやりがあると感じました。

Kちゃんと一緒の時間を過ごす中で、会話でコミュニケーションをとることは難しいけれど、話しかけて表情や反応でKちゃんがどう感じているのかを感じ取ることができると知りました。体から出ているチューブも近くにいたり、一緒におやつを食べるだけでは抜けないことも分かり、安心してKちゃんといふことを楽しめるようになりました。Kちゃんは話しかけると私の名前をたまに呼んでくれたり、体をゆらしながら笑ったりしてくれます。近くにい

ると、時々ぎゅっとハグもしてくれて幸せな気持ちになります。

私は料理が好きです。なので、お菓子をもらったお返しにKちゃんにご飯を作って食べてほしくなりました。Kちゃんのお母さんからKちゃんは肉が好きだと聞いたので、この前一緒に遊んだ時に、からあげとおにぎりを作って私のお弁当より小さめサイズのお弁当にして食べてもらいました。Kちゃんが一生懸命に私を作ったお弁当を食べてくれて嬉しかったです。

Kちゃんがくれた一枚のお菓子から、私は幸せを分けてもらいました。そしてその幸せをKちゃんにお返しすることができてさらに幸せな気持ちになりました。私は、大切な友達のKちゃんと幸せな時間を過ごしています。